たのしい学び。本当の学び。大人も子どもも！— クラス便りとエッセイ

山びこ通信

DISCE LIBENS!
学校法人 北白川学園
山の学校
LVDVS COLLINVS

2016
Apr.-Jul.
春
学期号

しぜん 2~4　イタリア語 13　ラテン語 15,16　ウェブプログラミング　ロシア語 13
歴史 11　ギリシャ語 16　かいが 18　ユークリッド幾何　フランス語 14　数学 9
ことば 6,7　つくる 5,6　漢文　かず 8,9　ドイツ語　イベント 将棋道場 19　英語 7,10
ロボット工作 17　山の学校ゼミ（社会 12 / 数学 / 調査研究 7 / 法律 / 生活と文化 / 倫理 ）

文学部で学んだこと
——100年先の世界のために

山の学校代表　**山下 太郎**

私は英文科四回生の秋、思い切って西洋古典文学に専攻を変える決意をした。岡道男先生（当時の主任教授）のおられた研究室は、今はなき煉瓦造りの旧館二階にあった。専攻変更のお願いをするため、おそるおそる先生の部屋の扉をノックすると、万巻の書物がそびえ立つように見えた。先生は私の志願理由を頷 きながらお聞きになり、ご自身も独文出身であると打ち明けられた。私がラテン語もギリシア語も 4 時間コースを履修していないことを察知されると、「語学は慣れです」と口にされ、先生の実践されたラテン語、ギリシア語習得法——先生はこれらの言語を学部の一、二回生の頃に習得された——を次のように語って下 さった。まず、春休みの全期間、その言語の習得のことだけを考えて集中的に独学する。その際、文字通り寝食を忘れて取り組むこと。次に、新学期から開講される西洋古典の演習に出席し、辞書を引いて原文を読む訓練を続けること。

私が目をぱちくりさせてお話を伺っていると、先生は書庫から両手でないともてないような大型の辞書や注釈書を机の上に運んでこられ、ギリシア語、ラテン語それぞれの単語の調べ方、注釈書の使い方を教えて下さった。時間にしてゆうに一時間を超えていただろう。そのころ先生は後期の授業でキケローの『国家について』を読んでおられたが、該当箇所のコピーを渡され、次回の授業から参加するようにと言葉を添えられた。勇んで参加した授業のレベルは私の想像を 絶するものであった。参加者は錚々たる院生ばかりが五，六人、学年順にオックスフォードのテキストを飛ぶように訳していかれる。ちらっと横目で覗いても、テキストに何も書き込みは見あたらない。私はといえば、原文のコピーを拡大してノートに貼り付け、余白に辞書で調べた結果をありったけ書き込むものの、辞書を引くだけで精一杯のありさまであった。先生はときおり「ここはこう訳してもよいですね」と簡単にコメントされるのみで、あっという間に数ページの訳のチェックが終了する。驚いたのはその先で、先生はもう一度最初から原文をご自身の言葉で訳していかれたのである。重要な箇所については「ここは（学問上）問題の箇所で、後で説明します」とコメントされ、そのままどんどん先を訳していかれた。まるで日本語の訳を朗読されているかのように。こうして二度にわたる原文の訳読が終了すると、今度は細かな字でびっしりと書き込まれた研究ノートのコピーが配布された。そこには、解釈上の争点が文献案内とともに整理されていた。先生はこのノートに即して従来の学説を整理され、あわせてご自身の見解を開陳していかれるのだった。〈▶巻末へ続く〉

発行元　学校法人 北白川学園 山の学校　〒606-8273 京都市左京区北白川山ノ元町 41

『しぜん』（A・B1・C1・C2）　担当　梁川 健哲

A クラス

A（火曜）クラスでは、「秘密基地」に新入生を案内するところから始まりました。森の奥に着くと、辺りを用心深く見回してから、みんなで秘密基地へと滑り込みます。「わぁ、昔のおうちみたい！」１年生たちは、竹のベンチに並んで腰掛け、感嘆しています。「ここが窓」「ここが秘密の出入り口」と得意げに解説してくれる先輩達。「絶対に僕たちだけの秘密だからね。」

そして今度は、「仲間入りの儀式」であるかのごとく、基地から続く斜面の「滑り台」を代わる代わる何度も滑り、みんなでお尻を真っ黒にして遊びました。豪快に滑って勢い余っても、柔らかい土や木立ちがそっと我々を受け止めてくれます。

「あ、まって！」時折声を上げるのは A ちゃん。押しのけられた落ち葉の下に木の芽が生えているのを発見し、大事そうに脇へ除けます。

３～４年目を迎え、日増しに「先輩」になっていくみんなの中に、温かい眼差しがあるのを感じます。自然との、そして仲間との絆が、またこの一年間を通して深まって行くことを期待しています。

B1 クラス

B1（木曜）クラスにも「秘密基地」があり、みんなにとっての拠り所となっています。この季節、沢も人気のある場所なので、どちらへ向かおうか、というのが毎回悩ましい問題です。学年も、その日の気持ちも違う仲間同士、すんなりと折り合いがつかないこともありますが、大抵の場合は気が付けば意気投合しています。筍掘りをしたときも、互いに助け合う場面がありました。回を重ねる中で、仲間を思い遣る気持ちが一層育まれていくことを願っています。

最近流行っているのは「武器」を集めることです。ふと拾い上げた枯れ枝が、手に持ってしっくりくる時の、何とも言えない高揚感。魔法の杖や剣、時には SF 映画にでも登場しそうな流線型の光線銃が落ちていることもあり、それらは嬉しい驚きをもって即座に宝物となります。いつの間にかみんなで弓矢作りをしていた日もあります。弦だけは凧糸を利用しましたが、弓らしい形をした枝も、まっすぐの矢も、探せばそこに見つかります。

「次回は弓飛ばし大会をしようか」「クサイチゴの実が生る頃だよ、食べたいね」そんなことをみんなと話しながら、クラスは展開していきます。

C1 クラス

C1（月曜）クラスでは、５月の連休前に筍掘りを提案しました。ところが、「え～、僕、タケノコ苦手。」「私も。最近、給食もタケノコばかり・・・。」と乗り気ではありません。それでも私には「掘りたてを焼いて食べる」ことの楽しさに確信があったので、「この時期にしか出来ない特別なことだから、いつもと違うかもしれないよ！」と言って、みんなを筍探しへ誘いました。

◀昨年度の取り組み「葉っぱ図鑑」は
とうとう冬学期の最後に完成しました！

筍を見つけること、そして掘ることは、味とは全く別物のようで、二人は夢中になっていました。そうした楽しい道中にも、山の恵みを頂くときには決して欲張ってはいけないこと、慎ましい気持ちを持つことを伝えるように心がけています。

薪を組み、マッチを擦り、火が十分に育ったところで皮ごと筍を投入し、火力を保つために薪を焼べていく。その小一時間ほどの過程も、飽きないものです。真っ黒こげに焼き上がった筍を取り出して包丁で割ると、黄色っぽく色づいた身が現れ、焼きトウモロコシのような甘い香りが広がります。皮を剥いた筍の先を神妙な面持ちで見つめ、二人はおそるおそるかじりました。

５秒くらいして、「あっ！」と大声でＮ君が叫びました。Ｆちゃんも首をかしげながらにこにこ笑っています。その先の説明は要らないでしょう。してみて本当によかったです。

焚き火を消して、最後に山の神様、火の神様に感謝を込めて「有難うございました」の挨拶をしました。

C2 クラス

C2（月曜）クラスの５人はとにかく活動的です。雨でも構わず外へ出かけます。特に沢での活動が好きで、水辺の生き物を見つけることが得意です。

この春学期には、沢蟹やカエルをはじめ、ヨコエビ、特大のヤゴ、小さい蛇、他にも鹿の骨といった発見もありました。

沢にはヤゴと見紛うような赤茶けた落葉がたくさん落ちているのに、よく見つけたなぁとひたすら感心しながら、私はＡ君に訊ねました。「そのヤゴ、お家で育てられるの？」「育てられるよ。トンボになって、部屋を飛び回ったこともあるんだよ。」これには脱帽です。「前に採った沢蟹、ごはんあげていたらすごく大きくなったよ。」とＲ君も教えてくれます。

捕獲した生き物を、そのあとどうするかは基本的に各自に考えてもらっています。その場で放す場合もあれば、持ち帰って育てる場合もあります。指を挟む沢蟹のハサミの力、飛び跳ねたカエルが手のひらに当たる感触。手にとってみなければ感じることの出来ない命の躍動を、今、みんなは体の中にせっせと蓄えているところなのだと思います。

時には思いがけず手の中で生き物がぐったりとしてしまうこともあります。それとは逆に、調理して美味しく頂くという体験（沢蟹の素揚げ）も、みんなは昨年度、小坂先生のもとで積んでいます。

体に刻まれたそうした感覚の全ては、命の理解、生き物たちへの愛着として結晶し、これからもみんなの心の中で膨らんでいくことでしょう。

新任講師のご紹介

2016 年 4 月着任の先生です。▶P.4,6 をどうぞ御覧下さい。

・『しぜん B2』『つくる2～3年 B』クラス担当

藤田 温士（ふじた あつし）

京都造形芸術大学
環境デザイン学科３回生

・『しぜん B3』クラス担当

森山 純（もりやま じゅん）

京都大学大学院理学研究科
生物科学専攻動物学教室
動物系統学研究室 博士課程２回生

『しぜん』（B2）　担当　藤田 温士

「しぜん B2」クラスは六年生の男の子二人と三年生の女の子一人の高学年クラスです。前任の先生から引き継いだクラスで、お山の学校に関しては子供達の方が詳しく、山を案内してもらうところからスタートしました。以前にどんなことをしたか。何を発見したのか。どこまで行ったのか。子供達は目を輝かせながら当時の思い出を語ってくれました。その姿は、子供達にとって自然の中で過ごした時間が、いかに大切なものであるのかを感じさせてくれました。

子供達と山を歩くと、持ち前の好奇心と発見力を大いに発揮し、色々なものを拾って見せてくれます。あるときには「ゼンマイ」という山菜を大量に、またあるときには「鹿の骨」を見つけて見せてくれました。このように、自然を五感で感じ取り、大人よりも多くの情報を山から吸収しています。

これからは山の中での発見をまとめた「見つけたもの図鑑」を作りながら、自然の中で色々なことに挑戦していこうと思います。

『しぜん』（B3）　担当　森山 純

このクラスは１年生４人。みんな毎回外に出たくてウズウズしているようです。去年までのしぜんクラスのはなしを聞いているからか、「秘密基地をつくりたい！」という声を聞きます。私が、「よし、じゃあ探検して良い場所を見つけようか」と言って出かけると、いつの間にか秘密基地のことは忘れ、落ち葉や花びらを拾いながら森の中をかけまわります。サワガニやカエル類を見つけて虫かごに入れ（ 写真 1)、その生き物がいたところを参考にしながら生息環境を作り上げます（ 写真 2)。最初は水を入れただけだったので、「それだけで大丈夫？」と声をかけると、「やっぱり砂は入れた方が良いね」「隠れ家の石があった方が良いかな」と、5 分後には虫かごの中に最適な環境を作ってしまいました（写真 3)。１年生とは言え、彼らの観察力は目を見張るものがあります。また、幼稚園生時代にも何回も森の中で遊んでいたようで、「ここで〇〇をつくったんだよ！」「ここには ×× があったんだ」など、私に色々と教えてくれます。

森に入った後に「やっぱ帰りたい」「賛成」と言い出すこともあるのですが、私が「じゃあ多数決をとろう。帰りたい人？」と聞くと、なんと誰も手を挙げない。「え、じゃあもっと先に進みたい人？」と聞くと、全員勢いよく手を挙げる。なかなか気まぐれなメンバーですが、ひとりひとり異なる独特の感性をもっていて、4 人でちょうど良くまとまっています。そして、毎回何かしらを持って帰り、観察会が始まります。じっくり観察して図鑑で調べる子、花びらやその他の植物を組みわせて色とりどりな作品をつくる子（ 写真 4・5)。各々が、各々の感性にしたがって行動しています。彼らはまだ小学校に入学したばかり。私はしばらく彼らの行動を微笑ましく見守りながら、心身の成長を助けていければと思っています。

『つくる』（1年・2～3年Ａ・3～4年・5～6年） 担当　福西 亮馬

1 年生クラスでは、男の子は空き箱を使った工作をよくしました。カッターナイフやホットボンド、ラッカーといった新しい道具も、危なくない範囲で夢中になって試し、どんどん手の内に入れています。女の子は、米粉ねんどで色々な食べ物を作りました。ねんど自体が着色されていて、絵具を使わずとも指で混色できる楽しさに、すぐ入り込んでいました。

2 ～ 3 年生クラスでは、木工をよくしました。森で拾ってきた枝を相手にのこぎりで格闘し、最後はパチンコを作りました。またバルサ材をボンドでくっつけて、真田幸村の刀や貯金箱を作りました。最近ではダンボールの武器作りに夢中になりました。

3 ～ 4 年生クラスでは、「こんなものを作りたい」というリクエストがよく出てきます。それで、ゴム鉄砲やロビンフッドの弓、モーターで動くスピードカーなどを作りました。その後は（去年のクラスでした）ダンボールに回帰して、好きな武具を作り、チャンバラごっこを楽しみました。

5 ～ 6 年生クラスでは、ひねもす（パイプ工作）とホットボンドでボウガンを作りました。的に刺さるための矢の改良に、時間を忘れました。またこの間、折り紙のユニット折りで 120 枚組の多面体を完成させました。

生徒たちが夢中になっている時。帰り際に笑顔を見せている時。次はこうしようという期待をしゃべりながら石段を下りている時。そうしたかけがえのない時間のパーツを、次回もまた作っては組み立てていく、そんなお手伝いが、私にもできたらいいなと願っています。

『つくる』（2～3年 B）　担当　藤田 温士

「つくる２～３年 B」のクラスは二年生二人と三年生一人の女の子三人のクラスです。静かなクラスになると思いきや、話し声と笑い声が絶えず、たまに叫び声が入るほどの賑やかかつ元気なクラスになっています。

今までは新聞紙で服を作ったり、色のついた粘土で作ったりしました。しかしその枠に収まらず、ダンゴムシの家を箱で作ったり、ホワイトボードに絵を描いたり、外に出てみたり。想像もつかない方向に飛んで行く底知れない好奇心にいつも驚かされています。

その中でもひとつのことに集中したときの集中力には目を見張るものがあり、それぞれ個性的なものを作りだしてくれます。まだまだ日が浅いですが、これから提案するお題にどのような形で答えてくれるのか。とても楽しみにしています。

『ことば』（3～4年）『ことば』（2～5年）　担当　福西 亮馬

フラココと　風ときょう走　五時五分　Sizuku（3年生）

フラココとはブランコのことです。それを春の季語だと紹介したその日は、嵐のような風が吹いていて、大きなクスノキが右に左に傾いでいました。落日はまだ高いところにあり、雲に覆われて白くぼんやりと輝いている時間帯でした。

この句は、夕日を見るつもりで園庭の柱時計の方を向くと、五時五分だったことを表しています。そして「春の夕暮れ」という言葉を使わずに、時間でそれを表しています。作者は、新しい学年になったばかりで胸を張っており、うら寂しい日差しの中、ブランコを漕いで、風と「きょう走」しています。前に乗った時よりも少しだけ小さく感じる幼稚園の遊具。往復運動。風との対話。

作者によって見事に切り取られたこの時間は、いつまでもこの句の中において、動き続けることでしょう。普遍性のある一句だと私

は思いました。そして何度となくこの句を私は口頭でも頭の中でも反芻したので、すっかりと憶えてしまいました。きっと忘れないだろうと思います。

３～４年と２～５年の両クラスに共通して、春学期は俳句に取り組みました。
最初は芭蕉や蕪村などの句を一緒に暗唱します。そのあとで教室の外に出たりして、自分の目にしたこと、思い出したことを五七五のフレームの中に収めることを楽しんでいます。ちょうどカメラを持って出かけるような感覚です。

春の雰囲気を、生徒たちは色々と表していました。「明るい」「始まり」「花咲く」「ゆれる」「月から（ウサギが）見ている」……。言葉に表したからこそ、同じものを見ているようで、実は違ったところに注目しているのだと分かりました。また、「自分もそれを言おうとしていた」という共感や共有が生じるところが、「ことば」のクラスだと思いました。

俳句以外の取り組みでは、３～４年クラスでは、百人一首をしています。これは２年ほど前から続いています。生徒たちがなかなか「飽きた」とは言わずに、むしろ「今日、百人一首する？」と聞いてくる様子を見ると、古典というものの懐の深さを感じます。いつの間にか私の知らないうちに生徒たちが新しい歌を好きになってくれていることが、新鮮な驚きです。
そのような生徒たちに触発されて、私自身も素人ながらいくつか歌集を紐解きたいと思うようになりました。和歌には、百人一首を入口に、日本の古典作品として何千何万という数が残されています。まさに言の葉です。私も「ゆかし」という気持ちで、いざそれらの一部分に触れてみると、昔の人たちの心の清水の流れに手を差し入れるようで、なんとも「おいしそう」であり、「きらきら」としたものを感じます。その「きらきら」としたものを背景に授業をしたいと思います。
２～５年クラスでは、昨年度にことわざに興味を持った生徒がいました。そこで、故事成語の出典（主に漢文）を探してきて、なるべく出典通りのエピソードを読んで味わっています。
また、生徒たちが質問をすることが大事だと考え、最近では「推理クイズ」（水平思考クイズ）をしています。その取り組みでは、生徒たちが名探偵となって推理し、状況を質問することを楽しんでいます。
毎週の様子は、山の学校のブログに書いています。ぜひそちらもご覧ください。

『ことば』（1～2年）山の学校ゼミ『調査研究』『英語講読 C』

担当　浅野 直樹

日本語や英語といったことばを通じて、あるいは調査研究によって、世界を広げるきっかけとなるようなクラスになればと思っております。
ことばクラスの受講生たちは何もかもが新鮮なようでこちらとしても身が引き締まる思いです。毎回１冊を読むことに決めているえほんも、きっと刺激に満ち溢れていることでしょう。自分で文を書いてもらうにしても、１年生は習ったばかりのひらがなやカタカナを、２年生は知っている漢字を、それぞれ実践的に使う場になっています。私が何気なく話していることも新奇に聞こえるようです。あるときに「その場で考えてください」と言ったら「すなば？」と聞き返されたので、「『すなば』ではなく『その場』、前もって考えておくのではなくそのときになって考えるという意味です」と釈明したということもありました。
英語講読クラスではデューイの世界観にも慣れるとともに、哲学の世界でされてきた議論にも親しむようになりました。最近読んでいる箇所の論点は観念論（idealism）と実在論（realism）です。観念論は錯覚などの例を出してあらゆる物事は人間の精神が作っていると主張するのに対し、実在論はあらゆる物事がそれ自体で存在していると主張します。あらゆる物事は人間の精神登場以前にも存在していたのではないかと実在論は観念論を批判し、そもそもそうした議論も人間の精神の産物ではないかと観念論は実在論を批判します。このような議論はそれ自体が興味深いですし、他の哲学的な文章を読む際にも役立ちます。
調査研究クラスでは興味や必要に応じて世界を広げることになります。新しく調査研究を始めるとしたら自分の興味をできるだけ明確にするとともに、既存の資料や研究にどのようなものがあるのかを調べる必要があります。このあたりは手探りで進むので不安と期待が入り混じります。ある程度調査研究を進めてきて発表原稿を作る段階では、説得力を増すために、新たに統計データの図表を使おうと思うことなどがあります。そこでもきっと新しい発見があることでしょう。

『かず』（1～2年）『かず』（3～4年）『中学数学 A』

担当　吉川 弘晃

今年度のかずクラスは、小学１～２年の方は４人、3～４年の方は３人の受講生でスタートです。昨年度までと同様、前半は自分の頭を使って課題に取組み、後半は数を使ったゲームを友達と一緒に行うという方針で授業を進めています。

小学１～２年の方の課題では、迷路とクイズの２つを１週毎に交互に行っています。迷路については「行き止まりを先に探すこと」を心がけてもらっています。１枚目の簡単な方が出来た生徒さんには２枚目の難しい方に進んでもらう、というシステムですがまだ2枚目クリアは出ておりません。頑張っていきたいところです。クイズの方は、4人にそれぞれ違う問題を出して、最低15分間、自分の頭で考えてもらいます。図を描いたり、表にしたり、定規で測ったり、どんな方法でもとにかく答えに一歩でも近づけるよう講師はヒントを出していきます。

小学３～４年の方の課題では、かけ算や割り算の文章題を解いてもらっています。この時期になると九九だけでなく２桁以上の筆算も増えていきますが、多少複雑な計算でも正確にできるようになると共に、それを具体的な事例で考えてみるという訓練もしっかりと行います。
また、計算や問題の解き方を頭で理解することも重要ですが、算数は一つの技術である以上、何度も反復練習を行い、同じような問題が出た場合に自分自身で解けるようにならねばなりません。よって今後は「おさらい」の時間の設けていこうと考えています。

中学数学は、２年生になると計算が複雑になるのは勿論、論証作業がますます重要になってきます。答えがたまたま合っていた、特定の条件だから解答できた、では通用しないということです。算数は戦前の教育課程では「算術」といいましたが、要は計算の「術」であり、具体的な数値や条件に対して正しい答えを導くことが第一の目標であるといってよいでしょう。これに対し、数学は「学」、すなわち、前提となる数値や条件から自分自身で一歩一歩、筋道を立てて考える、という科学的態度が求められるのです。例えば、「連続する３つの偶数の和が６の倍数になることを証明せよ」という問題は、2＋4＋6 ＝ 12 という１つの具体例を出せば分かった気になりますが、逆に言えば１つの例を示したにすぎません。どうやって文字 n を置くか、n は整数にするか自然数にするか、そもそも自然数とは何か。この授業では問題演習が中心となりますが、これまで通り、「道具」の使い方については丁寧な解説を心がけています。

『かず』（2～3年）

担当　福西 亮馬

授業の前半は個々で考えるプリントをし、後半はクラスみんなで考えるゲームをしています。

プリントには二種類あります。一つは計算や文章題、もう一つはパズルです。先取りはあまりせずに、復習寄りのことをしています。ただし、強調しておいた方がよい数学的な内容については、先を見据えて重点的にすることがあります（たとえば九九だと二乗の数、長さ比べだと三角形の二辺の和が他の一辺よりも長いことなど）。

パズルでは、ねばり強さと論理性とを積み重ねています。パズルが解けた時の達成感は、考えることそれ自体を楽しむことにプラスになります。感覚的に解けることから次第に論理的に解けることが面白くなるような移行を図っています。

後半のゲームでは、『石取りゲーム』をしたことがありました。21 個の石を用意して、1～3 個ずつ取り合い、最後の石を取った方が負け、というのがルールです。これには必勝パターンがあります。それについて考えてもらいました。以下はその解答です。

「最後の石を相手に取らせるためには、1 ターン前の状況では『場の石を何個にすればいいか』」というように考えます。それは 5 個です。なぜなら、場の 5 個から相手が 1 個取ればこちらは 3 個取ればよく、2 個取れば 2 個、3 個取れば 1 個取って、いずれも相手が次に 1 個取る状況にできるからです。同様に、場を 5 個にするためにはその前のターンで 9 個にしておけばいいことになります。そうして、1、5、9、13、17、21 という数列が見えてきます。つまりこのゲームでは先手（場の石が 21 個で自分の番という状況）を選んだ時点で「負け」になります。

すると、2年生の生徒が 1+4+4+4+4……と、一生懸命足し算を始めました。そして「もうすぐ 100 を超える」といった報告が嬉しくなって、えんえんと先を続けていました。石の総数がどんな場合でも、「見たら勝てる表」を作ろうと考えたのでしょう。その計算の熱心さに私も驚かされました。3年生は、すかさずかけ算を使うことを思いつき、41、81、121 とあっという間に計算を進めていました。この場合はどちらがいいというわけではなく、それぞれに自分のやりがいを持っていました。現に最初の2年生は、一の位に3、7、1、5が繰り返していることに気付いて、「おー、なーるほど」と目を光らせていました。

こうした見守りも、勉強を好きになってもらうには大事なことだと考えます。

『かず』（5～6年）『高校数学』（1～2年）『高校数学』（3 年）　担当 浅野 直樹

少人数クラスだという特性を最大限活かして、その場で臨機応変にやり取りしながら、１つ１つの事柄を丁寧に取り扱っています。

かずクラスではイラストロジックをやってもらおうとしたら、受講生がこれと似た別のパズルと勘違いしたようで、ルールの把握に苦労しました。イラストロジックに似たパズルというものに心当たりがなかったので、どのようなパズルなのかを受講生にしつこいほど聞きました。家に帰ってから聞いたルールをもとに「同じ数字つなげる　絵　パズル」といったようにインターネットで検索して、「リンク絵」にたどり着きました。私もルールを一から学びながら解いてみると、だんだんコツがわかってきて、楽しくなってきました。その次の回以降の授業でリンク絵を導入したことは言うまでもありません。

高校１～２年クラスでは、同じ事柄に多様な観点から光を当てています。図形と方程式の分野では図形からアプローチしても方程式からアプローチしても正しい答えを出すことができることがありますし、図形的なアプローチが複数考えられる問題もあります。２次関数とｘ軸との共有点の個数を考える際には、判別式（D）を用いるのが一般的ですが、そこをあえて解の公式を使ってルートの中身がマイナスになると困るということを実感してもらいました。このように遠回りでも原理的に考えたほうが理解は深まるのですが、高校では大人数クラスで時間も限られているので、頭から判別式を導入するのでしょう。受講生も同様の感想を漏らしていました。

高校３年クラスでは自分なりのパターンを見出すことに注力しています。２次関数の平方完成でx^2 の係数が１ではない場合には、まずその係数でくくって、中括弧（{}）を使うという方針を立てています。式の中に絶対値がある場合は、慌てず騒がず絶対値の中身が 0 以上か 0 より小さいかで場合分けすれば安心です。損益計算では原価→定価→売価という順序で利益を乗せたり割引をしたりして価格を設定するので、売価がわかっていて原価を求めるときのように矢印をさかのぼる場合は、求めたいものを x とおいて矢印の向きに考えればよいというパターンを開拓しました。

『中学数学』B　担当　福西 亮馬

それぞれが自分の課題を見定めて、時間いっぱいに取り組んでいます。2 年生の Yta 君は資料の整理と文字式の復習、2 年生の S ちゃんは連立方程式と連立不等式、3 年生の Ywa 君は集合論と 2 次関数の範囲です。

資料の整理は、統計データの扱い方です。私が中学生の時には教科書になくて、単元に入ったのはここ最近の傾向のようです。おなじみの平均値はともかく、メディアン（中央値）、モード（最頻値）といった言葉に、私も大学時代に取った統計学のことを懐かしく思い出しました。そう言えば技術家庭でもプログラミングが必須になったそうですが、ビッグデータと言われたり、これからロボットの活躍する時代に合わせてのことなのだなと思い当たりました。

Yta 君は、分からないところは、いつでも「これはどういうことですか」と素朴に質問してくれます。それが Yta 君のアドバンテージだと思います。また、S ちゃんの教科書（問題集）を見ると、黄色い蛍光ペンの丸がついています。学校で解説なしでは解けなかった問題にそうしておいて、あとで解き直したり、山の学校で質問するためです。「可視化」という良い習慣なので、ぜひそれを推し進めてほしいと思います。

3年生のYwa君は、学校では高校の教科書をすでに進んでいます。致し方ないことですが、それが心配でもあります。集合論もその一つで、∩（アンド）や∪（オア）、ベン図、包除原理など、中学生のうちに理解して進むのはきつい道のりです。ただ、Ywa 君は包除原理にいち早く慣れたので、それを励みにして乗り越えてほしいと思います。

ところで、これは私見になりますが、中学数学で何を勉強したかと振り返った時に集約されるものがあるとすれば、それは「関数」（1次関数と2次関数）です。関数は中学数学の「顔」みたいなものです。他ももちろん大事なのですが、

最低でもここを押さえていれば全体の輪郭がぼやけないので、あとあと何とかなります。S ちゃんも Ywa 君も、学校がかなり先取りする方針なので、これから先もしも数学で落ち込んでしまうことがあったら、その時は、1 次関数と 2 次関数を塗り直して自信を回復する道筋があることを、私からは伝えたいと思います。

『中学・高校英語』『高校英語』（1～2年）『高校英語』（2～3年）『英語講読 A』

担当 浅野 直樹

新しい年度になったということもあり、継続クラスであっても前年度にしていたことをいったんリセットして、欲張りすぎずに地道な練習をすることを心がけました。

中学・高校英語クラスでは、毎回冒頭で中学レベルのリスニング問題をしています。最初のほうは中１で習うような簡単な文が読まれます。正解を選ぶだけであれば物足りないので、読まれた英文をそのまま繰返してもらってから答えの確認をしています。そうすると、音がつながっているなどして聞き取れていなかったところが明らかになります。また、中学で習う文法を含んだ短い英文を和訳するという練習もしています。few は「ほとんど～ない」のように否定的に訳すなど、見落としがちな点を確認することができています。

高校英語１～２年クラスでは高校英語の特徴的な構文を和訳する練習をしています。文法として習った項目もあれば習っていない項目もあります。文法で習ったのであればそのときのことを思い出してもらう復習になりますし、習っていなければ実力問題として挑戦してもらうことになります。

高校２～３年クラスでは語彙力が課題だと自覚している受講生には毎回、その前の回で登場した覚えるべき語を集めた小テストを課しています。大学入試を意識している受講生には過去問と似たような形式で難易度を少し落とした問題を解いてもらっています。どちらも作り手としてはついつい難しくしたくなるところをぐっと我慢して基本事項を中心にしています。

英語講読 A クラスでは、比較的難易度が低い題材に切り替えました。およその意味がわかるのは当然として、自分で本文のような英語を言うことができるかという意識で進めています。そうすると簡単な英文でも意外に自分でぱっと言うことが難しいことに気づきます。

『高校英語』 受講生の声

レベルに合わせて、授業をしてもらい、苦手だった英語を無理なく勉強できました。テスト前には自分の学校のテストの傾向に合わせて、対策をしてもらって、よい復習ができました。

受験前には、対策はもちろんのこと、いろいろなアドバイスをもらい、不安な気持ちを解消でき、とてもありがたかったです。（F.H さん／高校３年生　受講期間：2013 年９月～2016 年３月）

『中学英語』（2年）、『中学英語』（3年）　担当　吉川 弘晃

中学２年のクラスは、去年からの持ち上がりの生徒さんに加えて、受講生が 1 人加わって２人になりました。学びにとって過度な競争原理は害になりますが、共に学ぶ者をもつことは他方で適度な緊張感をもたらし、学習効果を高めることになるでしょう。事実、中学２年は動詞の不規則変化や重要な熟語をしっかりと暗記する必要があるため、毎週の小テストを欠かさずに行っていますが、２人ともしっかりとついてきています。

しかし、のんびりしている暇はありません。中間考査が終われば助動詞に不定詞、動名詞、比較･･･と身につけるべき事項は数多く待ち構えています。ここで重要なのは、各事項について一番大事な点に立ち返って何度も考えられるようになることです。「現在形とは何を示すか？」「現在形や過去形と進行形の時間感覚はどこが異なるのか？」要点を押さえたら、あとは練習あるのみです。読み書きのドリル演習や、イソップ寓話のテキストを用いた毎回の音読練習はその一環です。

中学３年の方は、長文読解を主とするクラスですが、半年以上に渡った『ブレイヴ･ハート』（Penguin Readers, 1999.）の講読がようやく終わりました。テキストは現地の中学生向けのレベルで書かれたものですが、関係代名詞や分詞のオンパレードに加え、分詞構文や関係副詞といった高校範囲に含まれる文法も時々出てきたため、その都度、解説を行いつつ、一文一文丁寧に読んでいくこと（音読と訳読）を心がけました。学校の学習だけでは英文での読書量は不足しがちですが、一冊を読みきるということは確実な自信につながることでしょう。

英文から歴史を学ぶことも忘れておりません。以前のテキストは、アーサー王というイングランドの英雄を扱っ

たのに対して、今回はウィリアム・ウォレスというスコットランドの英雄を扱いました。両者を含め、古今東西の英雄は大概、悲劇的な最期を迎え、それ故に英雄は集合的な記憶となり、その地で生きる人々に勇気と希望を与えます。それが穏健な愛郷心につながるにせよ、排他的な民族主義の種になるにせよ、神話の英雄は今もなお、世界中の人々の心に生きているのです。授業では歴史的背景を補足で説明しながら、国家だけでなく、地方や階級、集団といった様々な視点から人間社会について考えていきました。

『中学数学』『中学英語』 受講生の声

数学と英語に苦手意識があったので受講しました。

数学の授業では、学校の進度にあわせて用意してもらったプリントを解きました。分からない問題は丁寧に教えてもらい、なぜそうなるのか、などといった計算の過程も一緒に考えながら解説してくださったので、よく理解することができました。

英語の授業では、基礎英語を中心に勉強しました。最初のころは音読や、英語を日本語に訳して読むことが上手にできなかったのですが、回数を重ねるごとにスムーズに読むことができるようになりました。テスト前には学校の教科書にあわせたプリントを作ってくださり、重点的に勉強することができました。語句や文法の疑問があったときも分かりやすく教えてくださいました。

どちらの教科もテスト対策、受験対策をしていただき、それぞれの対策を十分にすることができました。毎週学ぶ事が多くあり、力をつけることができたと思います。授業を通して、学ぶことが楽しいと思うようになりました。山の学校のクラスを受講して良かったです。(R.K さん／中学３年　受講期間:2014 年４月～2016 年３月)

小学生『歴史』　担当　吉川 弘晃

生徒さんの強い要望により、今年度から開講されたクラスです。集まってくれたのは小学低学年から高学年までの 4 人、それぞれが歴史に対する幅広い興味と知識をもっています。授業では、単に歴史的な知識の量を増やすのではなく、一つひとつの事象を、「比較」や「関係」の方法を用いて考えてもらい、一つひとつの知識が大きなまとまりの中で繋がっていくような学習のあり方を身につけてもらうことを目標にしています。

授業形式は、インプットとアウトプットの組み合わせです。前者では講師が指定した教科書（小学生高学年～高校生向け）を全員で講読し、そこに講師が解説を加えながら、生徒は質問や議論を展開します。後者では教科書の講読で得られた論点の中で、生徒はそれぞれ興味をもったものを選んで、自分なりの問題を立て、図書館などで「調べ学習」を行ったうえで、教室で発表してもらいます。

今年度は、戦国時代に興味のある生徒が多いので、今谷明『戦国の世』（岩波ジュニア新書、2000 年）を冒頭から毎回 1 節ずつ、丁寧に読み進めています。本書は日本中世史の大家による室町時代後期から安土桃山時代を扱った概説書ですが、文章中の表現や言い回しは全体的に小学生にとっては少々難解です。そこで、必ず生徒さん自身に音読してもらい、分からない言葉や用語については、国語辞典や百科事典を使って、調べてきてもらいます。その後、背景知識について講師が解説を加えた上で、生徒さんは与えられた知識や設定をもとに「自分だったらどうするか」とシミュレーション的な思考を行います。信長や秀吉といったビッグネーム中心の読書経験では脇役となる町人・農民、敵役となる寺社集団、彼らがなぜそのように動いたか、もしくは動かなかったのか、という問題を当事者として改めて考えることで、「上から」、もしくは「中央（畿内）」の視点のみからでは見えない社会の全体像へと歴史的展望を広げることが可能となります。また、授業の中で各自が疑問に思ったことを調べてきてもらい、三分程度でその成果をみんなの前で発表するというアウトプットも適宜、行っています。

今後のクラスの方針としては、知識の詰め込みよりも、「知っている」つもりである知識の再確認に重心を置くつもりです。それは巷のクイズ番組のように用語の教科書的説明を瞬間的にできるようになることではありません。むしろ、「誰が」「いつ」「どこで」「何を」「なぜ」「どのように」･･･これら一つひとつの問題について、粘り強く考えて自分の言葉で表現できるようになることです。そのためにまずは、考えるための技術（話の聞き方、本の読み方、文献の調べ方、発表のやり方）を少しずつ学んでいくことからでしょう。

山の学校ゼミ『社会』　担当　中島 啓勝

この授業では、新聞や雑誌などから気になるニュース記事をピックアップして、それをわかりやすく、かつテレビなどではなかなか取り上げられないような角度から解説しています。対象は世界の政治・経済ニュースが中心ですが、エンターテインメントや IT などの話題に加え、日本国内のニュースも紹介しております。現在は四名の生徒さんたちと一緒に、和気あいあいとした雰囲気でああでもないこうでもないと話し合っています。

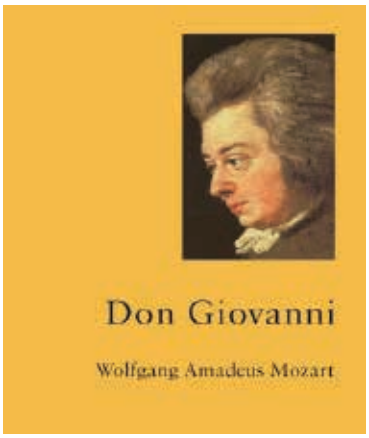
ニュース解説のほかに、もう一つの軸として課題図書の講読も行っています。「講読」なんていうと何やら物々しい印象がありますが、一人なら挫折してしまいそうな、いやそれどころか自分だけならそもそも手に取ってみることもなかったような専門的な内容の本を、みんなで毎週少しずつ読み進めていって気軽に感想を語り合うコーナーです。ここ最近では、作家の阿川弘之さんの息子でタレントの阿川佐和子さんのお兄さんでもある、法学者の阿川尚之さんが書かれた『憲法で読むアメリカ史（全)』(ちくま学芸文庫）を読み進めてきました。弁護士でもある阿川先生が、アメリカの歴史をたどりながら、憲法とはいったいどういうものなのかということをとても読みやすい文章で解説してくれる好著です。生徒さんたちとは「リンカーン大統領が露骨に憲法を無視した強引なリーダーだったとは」「最高裁判所って社会にこんなに深く関わっていたのか」など、新鮮な驚きを共有しています。近年、ここ日本でも政治のリーダーシップの問題や憲法の問題がニュースを賑わせることが増えてきましたが、この本はまさに、こうした状況を理解する上で大きなヒントを私たちに与えてくれます。

以前からこの授業では、「現代は民主主義の限界と危機の時代か？」という観点から、様々なニュースを分析してきました。そのことに関連していうと、今回の本に出てくる重要な論点の一つに、「民主主義」と「立憲主義」の関係、それも対立関係が挙げられます。「民主主義」と「立憲主義」の対立とは、「みんなの意見を政治に反映すること」と「憲法をしっかり守ること」が、時に対立してしまうのではないか、ということです。そして、もしこの二つが衝突を起こす場合、国の平和を守るために本当に大事なのは、「民主主義」なのか、それとも「立憲主義」なのかという、非常にややこしくて、ともすればつい感情的な言い合いに陥りやすい問題が浮かび上がってきます。しかし、このような難しい問題を、穏やかな雰囲気で楽しく学べるところがこの授業の特色だと、秘かに自負しております。

この授業では新しく参加してみたいという方を随時募集しております。政治や経済に関する前提知識は全く必要ありません。新聞やテレビ、インターネットなどでニュースを見ていて、ここがよくわからない、ここをもう少し詳しく知りたい、という方はどなたでもお気軽に覗きにいらしてください。お待ちしています。

『イタリア語講読』　担当　柱本 元彦

もしかすると今春から受講生が増えるかもしれないと期待し、どうしてもやはり難しい古典は避けることにしました。読みはじめたのは、ナポリの作家で現代イタリア文学界の長老、ラッファエーレ・ラ・カプリアの『四つの愛の物語 4 storie d'amore』です。半世紀ほど前に書かれた難解な長編 "Ferito a morte" で有名なラ・カプリアは、永遠に失われた過去のナポリを嘆いた後、年を経てどうやら自在の境地に達したらしく、このところ戯れるがごとく気のおもむくまま書き散らしています。そんな物語的エッセーは読みやすくて味わい深いものがあり、受講生の募集をしながら次のテーマを決める準備期間にちょうど良さそうに思われました。けれども新参者は現われないようですね・・・なので四つの物語のうちの二つだけで切り上げることにしました。それからはまた講師の趣味に走りまして、モーツァルトのオペラ台本をとりあげます。実は以前、詩の韻律を勉強するためと称して、この授業で『ドン・ジョヴァンニ』を途中まで読みました。そしてダンテやペトラルカやアリオストに挑戦したわけですから、ぐるっと一回りして二年ぶりに出発点へ戻ってきたようです。まずは残っている『ドン・ジョヴァンニ』の後半を読み終え、秋学期からはできれば『フィガロの結婚』や『コジ・ファン・トゥッテ』に進みたいと思います。『後宮からの逃走』がドイツ語なのは残念ですが、いわばその「初版」と言えなくもない『ツァイーデ』をカルヴィーノが再構成しています。『ティートの慈悲』『イドメネオ』『偽の女庭師』『牧人王』や『ミトリダーテ』にまで手を出すかどうかはさておき、ともかく、モーツァルト＝ダ・ポンテの三部作のように、イタリア語を知っていてよかった！と思える作品には滅多なことで出会いませんから、賛同される方、受講生まだまだ募集中ですのでよろしくお願いします。



『ロシア語講読』　担当　山下 大吾

前学期に引き続きチェーホフの短篇に取り組んでおります。受講生は T さん、N さんのお二方、この授業に限りませんが、毎週変わらず顔を合わせて読み進められるという環境に感謝しながらの講読です。前学期から取り組んでいた『中二階のある家』を読了し、その後 T さんのリクエストで、僅か数ページという規模ながらチェーホフ特有の世界が凝縮された好篇『大学生』を講読、現在は『大学生』の直前に記された『ロスチャイルドのバイオリン』を読み進めております。

『中二階のある家』の主人公は、「運命によって絶え間のない無為徒食に定められてしまった」ある画家で、プーシキンの描き上げたオネーギン以来、19 世紀ロシア文学の中で一つの典型となった「無用人」の系譜に連なる人物です。その彼の前に現れたのは二人の好対照な美人姉妹、姉リーダと愛称ミスュスィこと妹ジェーニャ。リーダは 3 等官という高官にまで上り詰めた亡き父親の遺産に頼ることなく慎ましく暮らすことを誇りとし、自ら貧しい民衆を救うべく、識字教育など各種の慈善事業にも積極的に取り組む女性で、その姿はかつて同じような活動に熱心に取り組んだチェーホフその人を髣髴とさせます。一方のジェーニャはまだあどけなさの残る純真無垢な姿が印象的で、画家は徐々に彼女に惹かれていきます。姉の態度には終始否定的で、短篇の山場となるリーダとの意見のやり取りの場面では、慈善事業とは実のところ単なる負担の押しつけに過ぎず、人間にとって最も大切な精神の解放に対して何より敵対するものとの持論を展開します。「必要なのは寺子屋ではなく、大学なのです」とはその折に出た彼の言葉の一つですが、人間が神々

と同等な高みに到達するという彼の描く理想的世界が、結局のところ決して実現されないことは彼自身も認めているのです。

「ミスュスィ、君はどこにいるんだ」―理想的女性の喪失を懐かしみ恋い焦がれる、この短篇を締めくくる画家の言葉は、もちろんそれだけでも印象的で耳に残りますが、ふと気づけば、画家はここで初めてジェーニャに対し「君」という気の置けない代名詞で呼びかけています。

『フランス語講読』（A・B）　担当　渡辺 洋平

フランス語講読 A の授業では、冬学期から、ジャン = ポール・サルトルの文学論集『シチュアシオン（*Situations*）』（1947）に収録されている、アルベール・カミュについての評論「『異邦人』解説（Explication de «Étranger»）」を読み、読了しました。後に「サルトル・カミュ論争」として知られる論争を起こすことになる両者ですが、この段階ではサルトルはカミュを高く評価しています。サルトルの解説は『異邦人』の読解としても非常によくできており、新潮文庫版『異邦人』の解説でも触れられています。そこでここでは少し別の少し観点から、思想的・哲学的な面について書いてみたいと思います。それは「時間」に関わる論点です。

サルトルによれば、『異邦人』の主人公ムルソーには「現在」という時間しかありません。例えば、ムルソーが、恋人のマリーに自分のことを愛しているかと聞かれる場面があります。ムルソーはそこで、「そんなことは何の意味もないし、おそらく愛していないだろう」と答えます。普通の人間ならば、たとえ四六時中相手のことを考えているわけでなくとも、愛していると答えるでしょう。それに対し、「不条理な」人間であるムルソーはそうは答えません。サルトルによれば、それは、ムルソーにとってはただ現在だけが重要だからです。母のお墓参りに行かないのも、もし行けば日曜日という「現在」が失われてしまうからです。つまり、「不条理な」人間であるムルソーにとって、時間とはその都度その都度の現在が継起することでできあがっているのです。サルトルはこのことを、ヘミングウェイ風の文体とも関連づけながら跡づけていますが、ここに隠されているのは、サルトルによるベルクソンへの批判です。ベルクソンは、サルトルよりも一世代上の哲学者ですが、彼は、時間は現在という点をいくらあつめても決して構成することができないような、不可分一体の流れだと主張していました。サルトルは『異邦人』を読むことでベルクソン流の時間とは異なる時間性を見つけたのでしょう。事実、論考の後半で一度だけベルクソンの名を挙げて、カミュによる不条理な人間と対置しています。このように文学作品を扱いながら哲学的な問題にまで踏み込んでいく読解は、文学者・思想家としてのサルトルの面目躍如と言えるでしょう。

今後のフランス語講読Aの授業では、ここで名前の出てきたアンリ・ベルクソンの講演論文集『精神のエネルギー（*L'énergie spirituelle*）』（1919）より、「心と体（L'âme et le corps）」を読んでいきたいと思います。

フランス語講読 B の授業では、引き続きルネ・デカルトの『方法序説』を読み続けています。最終部である第六部の後半にさしかかり、いよいよ終わりが見えてきました。すでにまとめに入り始めているため、内容としてはさほど書くべき事もありません。具体的には自分の考えを公表することのメリット・デメリッ

トを書いているのですが、この辺りは一種の学問論・人性論とも言える趣があるので、やはり各自で読んでみて、自分なりに考えてみることが大事だと思います。いずれにせよ古典を読むことの意味とは、人類が歩んできた道を見直し、現代がどのようにして生まれてきたのかを明らかにしつつ問い直す点にあると言えると思います。この意味で「近代」をひらいたとされるデカルトの著作は、肯定されるにせよ批判されるにせよ、これからも読み継がれていくことでしょう。

なお、この授業では春学期中の『方法序説』読了を目指しています。これが読み終わり次第、次は、Aの授業と同じアンリ・ベルクソンのもうひとつの講演論文集『思考と動き（*La pensée et le mouvant*）』（1934）から、「形而上学入門（Introduction à la métaphysique）」を読んでいく予定です。デカルトは科学の方法として特に分析と総合という方法を重要視しましたが、ベルクソンはそれを科学の方法として認めつつも、哲学あるいは形而上学は科学とは異なり「直観」を用いるべきだと主張しました。この辺りをデカルトとの思想との関連性も念頭に置きつつ読んでいきたいと思います。

なお、A・B どちらの授業も受講生を募集していますので、ご興味をもたれた方の参加・見学をお待ちしています。

『ラテン語初級文法』『ラテン語初級講読』　担当　山下 大吾

今学期は文法クラスが一名の受講生 S さんを迎え開講されております。次学期まで合計 24 回の授業を通して、岩波書店刊行の田中利光著『ラテン語初歩　改訂版』を教科書として用い、ラテン語文法の基礎を固めるコースです。S さんは西洋美術、その中でも特に絵画を専攻されており、ラテン語の成句に触れる機会が多く受講を決意されたとの由です。これまでにラテン語学習上の第一の山と評される第三変化を無事乗越えるなど、課程は順調に進んでおります。ゴールを迎える日が今から楽しみです。

講読クラスは前学期と同じく 4 クラス開講されております。その内 A、C、D クラスがキケロー、B クラスがホラーティウスという内容です。

A クラスは前学期までに『アルキアース弁護』を読了し、現在は A さんと共に前 55 年ルッケイユス宛ての書簡に取り組んでおります。自身のせっかちな性格と厚顔無恥を包み隠すことなく顕わにし、強烈な名誉欲に捕りつかれたキケローの姿を目にすると、『スキーピオーの夢』20 節以下で地上の栄誉のむなしさを大スキーピオーの口を通して切々と説く当人が同じキケローだとは到底考えられません。彼もまた人の子、皮肉にも第一級の史料としてのキケロー書簡の価値はそれだけ高まる結果となっています。

C クラスでは引き続き Cu さんと共に『老年について』を読み進めています。Cu さんの綿密な予習は今学期も変わることなく、平易から難解に至る様々なレベルをある程度見分けられる段階にまで到達されているように見受けられます。

D クラスのテクストは『トゥスクルム荘対談集』で、Ci さんと共に 1 巻の 15 節まで読み進めました。詩や弁論など他の分野と比べ明らかに劣っていると認められるギリシア哲学のラテン語化を目指すキケロー。それはこれまで目覚ましい活躍を続けてきた政治の世界から解放された今しかないと宣言し奮い立つ彼の言葉に励まされながら、プラトーンの対話篇さながらの精緻な哲学談議に毎回耳を傾けています。

B クラスは『諷刺詩』1 巻の折り返しとなる第 5 篇を読了したところです。同篇の内容はローマから南イタリアまでの旅日記とも評すべきもので、パトロンであるマエケーナースのみならず、そのサークルの一員でもあり、「絆の深さで私に敵うものは誰もいない」と評するウェルギリウスも登場し、興味は尽きません。その他食中りに襲われた自己の姿を、叙事詩のスタイルをもじる形で滑稽化するテクニックなど、ホラーティウスならではの表現の妙を Ca さんと共に味わいながら毎週読み続けております。

『ギリシャ語初級』　『ラテン語初級』
『ギリシャ語中級』A・B　『ラテン語初中級』
『ギリシャ語上級』　『ラテン語中級』A・B
『ラテン語上級』　担当　広川 直幸

ギリシャ語、ラテン語の授業は、基本的に初級、中級、上級の三つのレベルに分けている。これらに加えて、初級から中級への橋渡しとして初中級の授業を開講することがある。大体の目安を言うと、初級は初心者向けの入門、中級は散文あるいは平易な韻文の講読、上級は韻文あるいは難解な散文の講読である。

今学期、ギリシャ語初級では Peckett & Munday, *Thrasymachus* を、ラテン語初級では Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana* を教科書にして初歩を学んでいる。中級以上はと言うと、ギリシャ語中級 A ではアリストテレースの『詩学』を、ギリシャ語中級 B ではアリストパネースの『雲』を、ラテン語中級 A ではサッルスティウスの『カティリーナの陰謀』を、ラテン語中級 B ではオウィディウスの *Ars amatoria* を、ギリシャ語上級では、カリマコスの『アポロン讃歌』を読み終えてからアイスキュロスの『縛られたプロメーテウス』を、ラテン語上級では Catullus を講読している。さらにラテン語初中級では M. Hammond, A. Amory, *Aeneas to Augustus: A Beginning Latin Reader for College Students* を用いて実力養成に努めている。それぞれの授業の進度については、学期終わりにホームページに掲載するので、そちらで確認してもらいたい。

通常の授業に加えて、大抵夏期休暇中に講習会を行っている。ギリシャ語とラテン語の講読の講習会をそれぞれ一つずつ開講するのが習慣になっているが、リクエストがあればそれ以外にも、例えば文法に特化した講習会などを開講することができるので、興味があれば気軽に問い合わせてもらいたい。ちなみに、今年の夏は、ラテン語のテキストはまだ決めていないが、ギリシャ語はカリマコスの『ゼウス讃歌』を読む予定である。

『新約ギリシャ語初級』　担当　堀川 宏

この授業では引き続き『マタイによる福音書』を、ゆっくりとしたペースで読み進めています。必要に応じて基本文法を確認しながら、ギリシャ語原文の調子に注意して読んでゆくという方針も従来通りです。4 月から授業時間が、土曜の 10:40〜12:00 に変更になりました。受講生との都合の兼ね合いでしばしば休みを挟みながらではありますが、引き続き同書を読んでゆく予定です。

テキストは第 9 章に入っています（5 月 31 日現在）。第 5 章から続いていた「山上の垂訓」が終わり、第 8 章ではレプラ患者の「浄化」（レプラすなわち癩 (らい) 病は汚れとみなされ、その治癒が「浄化」という言葉で表現されています）を始めとする、イエスの奇跡についての叙述がありました。第 9 章では同様の奇跡を中心とするエピソードが語られ、第 10 章では「十二使徒」が選ばれて、イエスとその弟子たちによる伝道の旅は続いてゆきます。「新しい酒は新しい革袋に」など馴染みのある言葉も（引き続き）多く出てくるので、楽しみながら進んでゆこうと思っています。

『ロボット工作』　担当　小坂 諒

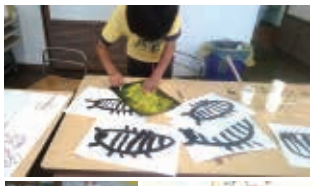
「ロボット好きの少年」というのは、いつの時代も変わらないようで、歳は離れていますが自分と似た生徒さんが多く、この授業では小さい頃の自分に当時は知らなかったマイコンというものを使った電子工作を教えているような気持ちになります。最近は授業が始まる前に、誰かが持ってきたドローンで遊ぶのが恒例になっています。今では私だけがドローンを持っていない状況です。私を含め、その場にいる全員がドローンをはじめとするラジコンが好きという状況は非常に良いことです。というのも、モーターがどのように回転していて、それが躯体の動きにどのような作用をもたらすかを操作して遊んだ上で知っているため、マイコン及びプログラミングの必要性を理解していて、仮にプログラムを書いたことが無くても、マイコンにどのような命令を送ればいいかを知っているからです。ほんの短い時間ですが、この時間がある意味この授業のメインでもあると思っています。

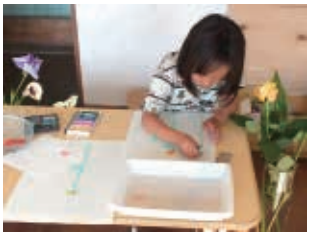
新しく 2 人の生徒さんを迎え、3 人の生徒さんと arduino を使った電子工作をしています。DC モーターが２つあり、それらを arduino で制御し、左右のキャタピラを動かす戦車のようなロボットを作っています。まず躯体を組み立ててモーターを取り付けました。私が何も言わなくてもラジコン好きの生徒さん達はとりあえず、この状態でモーターに電池を繋いでいました。もちろん単に繋いだだけなので、一定のスピードで回転して、離せば止まります。当たり前のことですが、電池だけでは動かすことは出来ても制御が出来ません。しかし、モーターがキャタピラを回転させて机の上を走っているという光景はラジコン好きならワクワクする光景であり、そしてただ前に進むことしか出来ないロボットをどう操作できるようにすれば楽しいかを考えさせてくれる光景でもあります。とりあえず電池を繋いだあとは、余っていたスイッチを見つけて、ブレッドボードに取り付けて、簡易コントローラーを完成させていました。今後は arduino で制御するのでスイッチでロボットを動かすことはありません。つまりスイッチはいずれ取り外すことになります。作業の流れだけを見るとこれは無駄な事をしているように感じますが、決してそんなことはありません。春の段階では、躯体を作り、モーターを取り付け、arduino を乗せ、配線を済ませ、そこから動かしてみようと考えていました。しかし、それぞれの段階で、とりあえず無理矢理にでもロボットを動かしてみるというのは、まず第一に楽しいことで、そして現状を把握するという意味でも大切なことで、間違いなく次のステップへ進むために重要な役割を果たします。これはロボットに限らず何かを作る上で非常に重要な姿勢だと感じます。

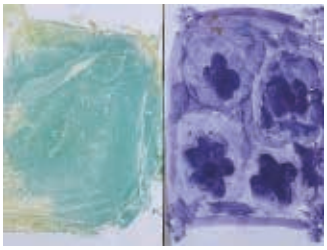
前学期から引き続いて作っている生徒さんは既に加速度センサの傾きでロボットを制御することができたので、サーボモータを使った砲台をどのように取り付けてどのように操作するかを検討中です。どのように弾を発射するかまで考えてきてくれて、既存のパーツでは作れなさそうなので、うまくいくかどうかはわかりませんが 3D プリンタでパーツを出力する予定です。とりあえず作ってみるという意味では、簡易的な3Dのモデリングの授業もできたらいいのですが90分という短い時間ではなかなか難しいでしょう。

生徒さんごとにそれぞれ違う進め方があり、今日の授業は全員がこれをやるという予定は立てないので手一杯な部分はあるのですが、「ロボット好きの少年」が「ロボットを作ることが好きな少年」になってくれるように力を貸せたらなと思っています。

『かいが』（A・B）　担当　梁川 健哲







● 線にこだわってみよう

春学期の最初には「線」の話をしました。「線で絵を描く」。誰もがこれまで何気なくしてきたことでしょう。線は絵画を構成する極めて基本的な要素の一つです。だからこそ奥が深く、線の強弱や、引くときの速さによっても、そして使う画材によっても色々な線があり、絵に表情を与えてくれます。

描画材として、墨汁と、割り箸や竹串、つけペン、大小の毛筆、およびインクペンを並べておき、試し書き用紙を用いて自分にしっくりくる画材、あるいはモチーフの表情に合いそうな画材を選んでもらいました。着彩の有無は自由ですが、線の表情を邪魔しないよう、パステルを用意しました。

モチーフとしては、筍が人気でした。やはり、筍のもつ性格がそうさせるのか、力強い線で輪郭を描く人が多かったです。また、墨の持つ雰囲気がそうさせるのか、俳句を添えてくれる人も。その他、外で拾った木の枝や鳥の羽でどんな線が描けるか実験してくれた人もいます。

● 混色を楽しもう

次に、「色」の話をしました。今回は、絵の具で積極的に混色をし、色を探求するために役立つヒントを幾つか伝えました。大きめのパレットを使ってその中にどれだけ色のバリエーションを置けるか早速実践しながら描いている人がいます。敢えて 3 原色でトライする人、12 色セットを使う人、画用紙の大きさも様々です。

引き続き、人気の画材、パステルに没頭している人も数名います。ふと見ると 2 年生の A ちゃんが画面上のパステルの粉を水筆で伸ばし、一見すると絵の具で描いているような画法を発明しています。「一色なのに、こんなに色（の濃さ）がちがうよ！」

また、パステルを削って粉にしたものを混ぜあわせる混色方法がみんなの間で自発的に試されていましたが、今度はそれを水で溶く人が現れます。見た目は水溶き絵の具のようです。「先生、これ取っておきたい！」そこで、小さいチャック付きポリ袋を渡しました。「出来た色に、自分で名前をつけても面白いかもね。」私が言うと、みんなは「水溶きパステル」を作っては袋に入れ、「美味しい抹茶」「薔薇」「そうげん」「チョコレート」などとそこに名前をつけていきました。

「先生、これって絵の具と一緒？」よい質問が S ちゃんから出ます。そこで、パステルと絵の具の仕組みについて比較解説しました。絵の具は「色の素」を「接着剤」の役目をするもので練ってありますが、パステルにはそれがなく、紙の繊維に入り込んで定着しています。

すると今度は、パステルの粉を、糊で練ったりボンドと混ぜあわせたりする人が出てきました。原理的には自分で絵の具を作っているようなものです。それは、「『原料探し』から始める絵」と題して数年前に行った、自作絵の具による制作課題に通じていました。その話をすると、「やってみたい！」と Y ちゃんが言ってくれました。

「何か、かいがクラスって、実験しているみたいだねぇ。」「そうそう、そうなんです。かいがクラスは、実験の場所なんです。やってみようと思ったことは、どんどん試していいんです！」一人がクラス開設当初からのモットーに気づいてくれたので、私もつい、声を大にしてみんなに伝えました。今年度も、良き学び合いの流れが出来つつあります。これからの展開をどうぞお楽しみに！

月例イベント 道場 『将棋道場』　座主　中谷 勇哉

新年度になり新しい顔も増え、嬉しいことにここ数回は毎回満員になっております。

さて、その中で、常連組は着々と昇級し、私と対戦することも増えています (4 級以上は先生と駒落ちで勝たなければなりません)。うまくすれば、最後には私と飛車落ちくらいにはなるのではないかという楽しみが出てくるほどです。

また、最近の将棋講座では相手の攻撃の受け方と必至 (あと一手で必ず詰む状態) 問題という少し高度な問題を重点的に出しています。昨年度も感じたのですが、こちらが少し難しいかなと思うようなことをやらせても、次の回では明らかに能力が上がっている、ということが多々あり (自分の家で必至問題をたくさん解いてきてくれた子もいました)、感心させられます。必至の概念が理解できれば、自分の王様の安全度と比較する計算問題のようになりますから、論理能力を鍛えるのにも役立つと考えています。

私より強い子が出てきてくれることを願いつつ、この調子で教えられればと思います。

〈● 巻頭文の続き〉

その後年月が流れ、大学院の修士課程、博士課程と進学する中、私の理想は岡先生のように流麗に原文を訳し、先生の流儀で研究ノートを作り、論文を発表することであった。すなわち、テキストの精読と研究史の精査からにじみ出てくる自分のオリジナルな解釈の萌芽を大切に育て、論文という花を咲かせること。しゃにむに勉強し、語学の問題以上に研究の壁に何度もぶつかったとき、私は先生の論文をどれだけ繰り返し読み返したことだろう。

先生が研究対象とされた原文を自分の手で徹底的に読み砕き、その後先生の論文を何度も読み返すこと。この繰り返しによって、私は論文の書き方に関し、先生の「攻め方、守り方」が目をつぶっても浮かぶようになった（気がした）。それは、有名選手のフォームをまねて素振りを続ける野球少年と何ら変わらぬ気持ちであった。苦労の末修士論文を提出し、先生から「100 年先の世界のために研究するように」と言われたとき、私は「普遍」という言葉を何度も心の中でつぶやきながら、熱いものがこみあげた。

その後さらに歳月は流れ、私は文学部でラテン語を 9 年間教える栄誉に浴したが、この間父の病状の悪化を受け、家業であった幼稚園を継ぐために本務校（京都工芸繊維大学）の職を一昨年辞した。愛着のあった文学部の授業（ラテン語 4 時間コース）のみ昨年度末まで続けさせていただいたが、この最後の年の授業では、前期に文法書を終え、後期にキケローの「スキーピオーの夢」を読むことにした。私にとって思い出深い『国家について』を締めくくる有名なエピローグである。熱心な学生たちとテキストを精読する時間は、文字通り至福のひとときであった。だが最終回の授業で hanc tu exerce optimis in rebus!（これを――汝の魂の力を――最善の仕事において発揮せよ！）という表現に出会ったとき、感無量の思いがした。ここで言われる「最善の仕事」とは、文脈に即して読むと res publica（国家）を守り発展させることであるが、このラテン語は広い意味で「公の仕事・事柄・問題」など多様な意味を内包する。引用したキケローのラテン語を吟味するうち「魂を込めて世のため人のために尽くせ」と読める気がしたのである。学問の世界から飛び出し、新しい仕事の継承と発展に心を砕いていた私にとって、この言葉は大きな励ましのように感じられた。一方で私は、文学部で学んだ philosophia（知を愛する心）を子どもたちと分かち合いたいという願いを込めて、幼稚園長就任と同時に、小学生以上の子どもたちを対象とした学びの場（山の学校）を創設していた。そこでは国語の教科書代わりにプラトーンやアリストテレースの作品を読み、講師と議論を交わす。キケローやセネカのラテン語を読み解くクラスもある。大人も子どもも無心になって学ぶ場がここにはある。

今の活動の原点には、岡先生によって res publica（公の仕事）としての研究の道を示していただいたことへの感謝がある。文学の研究とは、無数の人々に読まれてきた res publica（公共財産）としてのテキストを守り、次世代に伝える仕事のことであった。他の学部の研究が、現実に役立つものを成果として期待されることが多いのに対し、文学部の研究はいつも「普遍」や「理想」をテーマとし自由に議論することが許される点で「学問」の王道を行くものである。だが、この道を生かすも殺すも結局は「人」次第なのだと思う。論文の数を競ったり競わされたりする態度は、「私的な問題」（res privata）に執着することを意味するのである。だが、学問の意義はそのようなところにあるのではない。同様のことが教育に関しても言えるだろう。人を育てる道とは、畢竟「私」を超えた「公」の存在としての「人」を育てることである。再びキケローの言葉に耳を傾けるなら、res publica と呼びうるものは時空を超え、永遠に存在し続ける。また、人間にはそれぞれの立場でこれを守り育てる道が開かれている。今私は論文を書く者ではないが、「100 年先の世界のために」という志は、新しい仕事の中で変わらぬ意味を持ち続けているのである。

（山下太郎　京都大学文学部 100 周年記念誌所収、2006.6）

――本誌を手にとって下さった方へ

山の学校は、**小学生から大人を対象**とした**新しい学びの場**です。“**Disce libens.**（**楽しく学べ**）”がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

「山びこ通信」は、その様子をお伝えすべく、学期毎に年三回発行しているものです（春学期は６月、秋学期は 11 月、冬学期は２月）。ホームページでも、クラスの様子やイベント（毎月開催・無料）の情報などを発信しています。学ぶことが楽しくて仕方がない！もし、そうした気持ちを本誌を通し、少しでも皆様と共有することができたとすれば、望外の喜びです。

お申し込み・お問い合わせはこちらまで
TEL: 075-781-3215
FAX: 075-781-6073
E-mail: taro@kitashirakawa.jp
http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko

発行元　学校法人北白川学園　北白川幼稚園・山の学校　京都市左京区北白川山ノ元町41
FREE PAPER